バレーボール部OB翠巒クラブ

「全日本6人制クラブカップ 全国大会10年連続出場に際し」

高橋 浩生（78期）

高々バレーボール部OBによる社会人クラブチームである翠巒クラブは、昭和60年に発足致しました。サッカー部OBの翠巒倶楽部は、その当時すでに実績があり、我々もそのようなチームを結成したいということ、群馬に就職し、なんらかの形でバレーボールを続けたいという仲間が自然に集まった、そのようなスタートでありました。

結成初の群馬県大会は、決勝戦で桐商クラブに惜敗し、準優勝に終わりました。しかしながら、この敗戦が我々の結びつきを更に深めると共に、打倒桐商クラブ、群馬県大会優勝、全国大会出場という具体的な目標をも与えてくれました。

昭和61年の群馬県大会決勝は、前年と同じく桐商クラブ。一年間を掛けて打倒桐商クラブに練習を重ねた我々は、見事桐商クラブに勝利し、全国大会へと駒を進めました。全国大会は奈良県で開催され、予選リーグを勝ち抜き、決勝トーナメントへ進みました。決勝トーナメントではベスト8を賭けて東京教員クラブと対決しましたが、惜敗し、初出場は、ベスト16に終わりました。この大会の思い出としては、現高々バレー部監督田口哲男（75回）先生の奥さんも、同行してくれ、身重にもかかわらず、暑い体育館の中を水汲みに駆け廻ってくれたことです。

昭和62年の全国大会は大阪で開催されました。この年はメンバーも増え、会則等も作成し、会の大前提として、「群馬県におけるバレーボールの発展に寄与する」を掲げ、組織を充実させました。全国大会は毎年8月に開催されるのですが、この年は特に暑く、私などは、試合が終わると同時にブッ倒れ、真夏の大会恐るべしことを体験させられました。結局この大会はベスト32に終わりましたが、私は、社会人による全国大会とは、それまでの学生大会では味わえない、旅の楽しさや、色々な楽しみがあることを知りました。また、全国に散らばったバレーボールの仲間達と再会できることもあり、再び全国大会に出場したいという気持ちにさせてくれた大会でもありました。

昭和63年和歌山大会からは旅費節約のため自動車にて関西まで行くことに変更しました。この大会では、和歌山県在住の中村（旧姓金子）大司（77回）に一同大変お世話になりました。平成元年大阪大会、平成2年滋賀大会、平成3年大阪大会、平成4年奈良大会、平成5年京都大会、平成6年滋賀大会と全国大会に出場し、平成5年京都大会において唯一予選リーグ敗退を記しました。その他は全て決勝トーナメントに勝ち進んでおります。この間、会員が次々に結婚をし、全国大会に家族で参加する者もいたり、また逆に、家庭や仕事の事情により、出場できない者がいたり、それぞれ思い出深いものがあります。

いよいよ10年連続の年でありますが、我々の平均年齢も30歳台となり、群馬県予選から大苦戦となりました。決勝戦は、元日本リーグの選手を傭した高商クラブ。第1セットを翠巒、第2セットを高商で迎えたファイナルセット、0−7と相手にリードされ、もう駄目かというところで各人の火事場の糞力とでも言いましょうか、信じられない力が発揮され、逆転の末、群馬県大会優勝、全国大会10年連続出場を勝ち取ることができました。

10年目の全国大会は大阪で開催され、大会に先立ち、バレーボール協会会長より金のレプリカをいただき表彰されました。このレプリカは、高々にこれから完成する同窓会館に飾られることになっております。

10年連続全国大会出場できたことだけで良しとしていた我々ではありますが、いざ大会に望めば、そこは高々で培ったファイティングスピリットが燃えてきます。出場チームの中では、平均年齢は最高、しかし、平均身長は最低という翠巒クラブではありますが、またもや信じられない力と粘りを発揮し、全国ベスト16という成績を残すことができました。我々に負けたチームはさぞかし首を傾けたことでしょうが、我々としてはこの勝利こそ、まさしく翠巒の精神そのものであり、我々が高々生であった証であると思っております。

10年連続全国大会出場を成し遂げ、今後翠巒クラブのあり方も変わってくるであろうかと思います。しかしながら、サッカー部やその他の高々OBチームの先輩方を御手本とすると共に、我々が培った精神を現役生や後輩達に伝えて行きたいと思います。翠巒体育の皆様方には、これからも応援の程宜しくお願い致します。

（バレーボール部 78期）

サッカーと私

翠巒体育会副会長
佐藤義夫
サッカー部（58期）

私が母校にてサッカーをやっていたのが昭和三十一年より三十三年迄の三年間であった。当時県内の高校チームは十チーム（現在は六十四～六十五チーム）であったと記憶している。試合はキック・アンド・ラッシュ主体の荒っぽいもので今の高校生の〝華麗〟？さとは程遠いものであった。当時は、〝サッカー〟と言う言葉さへ知っている人が少なく、野球、ラグビー、バスケット等の球技に比べて知名度はかなり低く、我々が試合をやっていても応援も含め、見ている人が非常に少なかったことでもこれがわかる。最近の笛や太鼓、歓声のにぎやかさから見ればお通夜みたいなものであった。

現在は小学校からサッカーをする子供が多く、野球のチームが作れないと言われているほどだ、保育園でサッカーをしているところも多くなった。いずれも各団体の指導者、父兄の熱心さの現われであると思う。

今日のように日本でサッカーが世間の注目を浴びたのは、一九六八年（昭和四十三年）第十九回大会のメキシコオリンピックで杉山、釜本等の選手を擁して世界の強豪相手に東ドイツ、ブルガリアに次ぐ堂々の第三位、銅メダルを獲得してからである。以来三十年近くが経ったが、世界相手で上位に入るには未だ一歩、二歩の感がある。しかし一九九三年にはプロチームによるJリーグが発足し、外国より世界のトップクラスの選手を各チームが、億と言う契約金を払い、競って集め、彼らの効果もあり、日本人選手の試合に対する心構へ、駆引等を含め総合的な技術力が急速にアップした、この結果一九九四年（平成四年）に行われた、ワールドカップ（サッカー界ではオリンピック以上に権威がある）予選では出場にあと何秒という所まで行き、今年三月に行われたオリンピック予選で二位ではあるが見事アトランタへの出場権を得た。一九六八年以来二十八年目の快挙である、又今年の六月一日には、二〇〇二年に行われるワールドカップ開催国の最終投票が行われる。韓国・日本が競っているが、韓国の国を挙げての運動で五分五分と言われている、是非日本で開催をと願う一人であり、日本チームが親善試合でなく各国が真剣になるワールドカップでどの位の力を発揮できるものか見たいと思っている。

私は永く地元にいる関係もあり、サッカー部OB会、この翠巒体育会、市のサッカー協会等に係りを持たせて戴いている。OB会では昭和六十二年より六年間、会長を務め、体育会では設立の四十九年より係りを持ち、現在は副会長をやらせて戴き、会長の山口君（五八期、卓球部）や役員の皆様共に頑張っています。

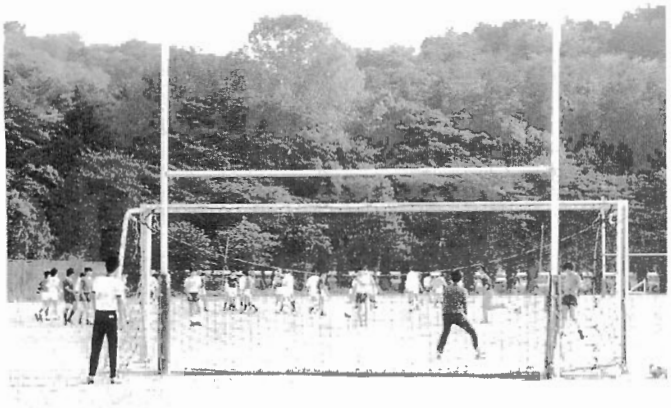
市の協会では、国峰会長（五十期、サッカー部）のもと、五十五年より理事長と言う大役を仰せ遣っている。なにもできない理事長ではいますが、永年務めていると言うことで、この春高崎市の体育功労賞を頂戴致しました。これも体育会の先輩、同輩、後輩の皆様や協会の皆様のご指導、ご協力のお陰と紙面をお借りし御礼申し上げます。今後も微力ではありますがそれぞれに頑張りますので一層のご指導お願い申し上げる次第です。

母校に於ては来年創立一〇〇周年を迎へます。記念事業として百年史の発行、同窓会館（仮称）の建設等が決定しています。会館の建設に対して行われている募金活動も大詰めとなりました。体育会の皆様にも尚一層頑張って戴きまして盛大な一〇〇周年を迎へようではありませんか、現役の諸君も伝統である文武両道のもと一生懸命頑張っています。大学入試に於ても勿論ですが、武の方では現在（五月）行われている県総合体育大会で前商、育英に続き、総合得点第三位（進学校ではトップ）と立派な成績を残しています。（今後行われる陸上競技の得点は入っていない）

各部OBの皆様も機会がありましたら、学校や試合会場へ出向き声を掛けてやって下さい、励みになると思います。

全国大会出場で一〇〇周年に花を添えられる様現役の皆さんに対する一段のご指導お願い致します。

最後になりましたが会員皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げますと共に翠巒体育会がより一層の発展をする様、ご協力をお願い申し上げます。



OB会の活動(1)

平成七年度現況報告

卓球部

堤　康高（71期）

卓球部OB会は、ここ数年決まって二つの活動を行っています。

一つは、現役との交流を目的としての卓球大会であり、もう一つは、親睦を目的としたゴルフコンペです。こちらは春秋の2回行っています。

卓球大会は原則として1月15日の午後に行い、そのまま新年会へなだれ込むのが定跡になっています。

例年は卓球大会へ参加するOBも多いのですが、今年は連休に当たったせいか、OBの人数はちょっと寂しいものになりました。

そこで、参加されなかったOBの方達に一言。

「現在の卓球部は、顧問となった鵜生川先生に引っ張られて例年になく活気があります。また、交流会で1年生の岸君が現役として初めて優勝したように、確実にレベルアップしていますので応援しましょう。

さて、翠巒体育会では去年から卓球部OBの山口新会長が誕生したこともあり、一層もりたてる意味で卓球部OB会の活動を盛んにしたいのですが、なかなか集まる機会がないのが現状です。

卓球という競技は2人で手軽にできるのが忙しい社会人にとっての長所と思いますが、逆に集まる必要が無いのがOB会にとってはマイナスのようです。

年一回の交流会を同期生との待ち合わせに利用するつもりで気軽に顔を見せるよう紙面を借りてお願いします。

バレーボール部

岩丸　高明（82期）

平成7年度バレー部OB会の活動としまして、まず恒例となりました新年会が、1月2日高崎ビューホテルに於て、約40名の会員の参加により盛大に行われました。

平成7年度は、掛川秀雄氏（48回）の会長任期満了の年であり、総会及び三役会で、次期会長候補に菊地俊二氏（52回）が推選され、11月に開かれた定時総会で、全員一致を承認、任命されました。

また次年度より、会計年度を1月～12月する議案も同時に承認されたため、去る2月に新年会を兼ねた定時総会が、新会長を迎え行なわれました。

新OB会として今後より活性化していくために、京浜地区のOBの方々への密な連絡、ゴルフコンペなど親睦目的の企画等の内容が議案となった。

また、今後継続していく活動として、最近名門復活の呼び声高い現役と連続出場記録をさらに延ばしてほしい翠巒クラブへのさらなる応援、援助が全員一致で確認された。

場所を懇親会へ移し、先輩方からは、心に残ったプレーや思い出話、エピソードが語られ、また来年の再会を誓って幕を閉じた。

次年度総会では、より多くの会員が、より良いニュースを持って集まることだろう。私も翠巒クラブの一員として11年連続全国大会出場のみやげ話をもって参加したいと思う。

サッカー部

清野　哲雄（74期）

翠巒クラブは、昨年の群馬県社会人サッカーの二部リーグでは、五勝四敗二分の成績となりました。今年もまた、一部昇格を目指し、群馬県サッカーに「高々あり」と称されるよう頑張ります。

今年はすでに、一月二日の初蹴会と一月二十日の総会・新年会が無事行われ、現在、新入会員を含めて、総勢四七〇名の会員となりました。

昨年は、第四回の高高・前高サッカー部OB会交流試合を、八月十二日に行いました。今夏は高々主催にて予定しています。OB会員には、奮って御参加頂きたくお願いします。

今後も現役サッカー部への物心援助をして参りますので、会員諸兄には、現役の練習や試合に応援の程よろしくお願い致します。

バスケットボール部

橋爪　良真（75期）

特筆すべきは、十年ぶりに現役の諸君が県ナンバーワンの座を奪還したことです。新春の新人戦で見事県優勝を果たしたのです。

昭和五十年代の高々黄金時代を築いた川島先生の引退に伴い、名将立見監督を高商より招聘したのが五年前。さっそく強豪復活の期待を込め、OB会一丸となってセルリアンブルーの遠征用大型バスを一台寄贈しました。

体力・戦力不足ながらも、高々の特長を活かした采配ですぐにベスト8、ベスト4の常連のチームになりました。しかし、上位校との実力差はそう簡単に縮まるものではありませんでした。

ようやく期が熟し、おそらく精神面での立見イズムの浸透が定着したのだと思われます。体力・戦力面のハンディはあい変わらずですが、今後は常に優勝候補の一角に名を連ねることになるでしょう。インハイ出場と新たなる黄金時代の到来をOB一同期待しております。

遅ればせながら簡単にOB会の平成七年度の活動状況を報告させていただきます。若手OB中心に恒例の元旦早々の現役との交流試合。卒業生の追い出し会への協力。五月末の3オン3大会及び総会。秋の市民大会への参加というところです。

OB会の活動(2)
平成七年度現況報告

軟式庭球部
石田　和久（75期）

私達軟庭部OB会は、昨年度は8月19日に開催致しました。昼間は高々テニスコートにて動かない体にムチ打って（私だけですが）現役との交流試合、その後は駅前の長谷川ホテルに場所を移し懇親会を行い、青春の思い出に花を咲かせました。

例年30名ぐらいの参加者が集まりますが、昨年は更に輪をかけてなつかしい新しい顔ぶれが集まり、非常に活気のあるOB会となりました。ただ寂しい事ですが、毎年東京から参加して下さっていた54期の堀越澄夫氏が病気の為参加出来ず、後12月には、ご家族の看病の甲斐もなく帰らぬ人となってしまいました。心からテニスを愛し、ご家族の話ですと入院が決まってからでも全国の大会に出場していたそうです。OB会の交流試合でも現役と白球を打ち合い指導をして下さった方です。大変悲しい事ですが、この誌を借りまして、ご冥福をお祈り申し上げます。

現役におきましては、高々軟庭部OBの福田先生（77期）、浦野先生（78期）を中心とした指導のもとに、年々実力を上げ、OB会としましても期待を高めております。

今年のOB会もまた夏に実施する予定ですが、今の輪を更に大きくしてゆきたいと思っております。

応援部
藤井　正弘（81期）

わたしたち応援部OB会は、毎年恒例の新年総会に加え、昨年9月には第1回応援部OB会ゴルフコンペを実施いたしました。新年総会以外に、会員同士のふれあいの場を設けることができ、二次会では、参加された先輩方から早くも第2回の会場や開催日程の話が飛び出すなど、大好評でした。ちなみに、優賞は飯島勇先輩（57期）ベスグロは早川弘先輩（57期）でした。今年は9月7日、軽井沢72を予定しています。第1回より、ひとりでも多くの会員の方に参加してもらい、このゴルフコンペが毎年恒例のものとなるよう願っています。

現役応援部員との交流としましては、春の翠巒会館での合宿の際、差入れをしたり夏の高校野球県大会において、県営球場や城南球場に激励に出かけています。

まだまだ、活動内容が薄いのが現状です。特に、現役応援部員や若手OBとの親睦を深める機会が少ないので、全体同窓会にもブラスバンド部のように、現役応援部員の参加を実現し、先輩OBと知り合う機会を増やしたいと考えています。

剣道部
飯野　一彦（74期）

剣道部OB会（「高高剣友会」）は、昨年も一月三日の現役との初稽古会と新年総会、さらに春夏の合宿、夏の社会人剣道大会参加と恒例の行事を行ってきました。

こうした中で、特筆すべきことは、現役剣道部が十三年ぶりに関東大会出場を果たしたことです。これは、顧問の先生の熱心な指導は言うまでもありませんが、OBの有段者が機会を見つけては現役の稽古相手になってやったこともその一因ではないかと思っています。この現役の活躍に対しOB会として、関東大会出場記念の試合用の胴を七組寄贈しました。日本武道館で行われた試合には、懐かしい大先輩方も応援に駆けつけ、試合をよそに昔話に花が咲くといった副産物もありました。現役が頑張るとOB会も盛り上がる好例といったところでしょうか。

また昨年度は、かつての顧問でありました別府重龍先生と上野臣吾先生がそろって県下の高校の教頭先生になられるという慶事も重なりました。両先生にお世話になったOBは、それぞれに先生を囲んでお祝いをしたと聞いていますが、こうしたことがまた一段とOB会の発展に

翠巒体育会 会計報告

会計　佐藤　義夫
〃　大崎　哲朗
監査　丸山　功一
〃　廣田誠四郎

平成7年度　　平成8年3月31日まで

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
前期繰越金	326,895	総会費	288,688
年会費	300,000	役員会費	52,298
役員会費	11,000	印刷費(会報)	257,500
助成金	300,000	慶弔費	27,000
雑収入	17,464	関東大会補助	110,000
合計	945,359	合計	735,486

同窓会

差引残高　209,873

つながっていってくれればと事務局として願っています。

野球部

清水　正郎（75期）

野球部OB会の最大のイベントとして、前高野球部OB会との定期戦が挙げられます。

昨年は、8月6日、高崎城南球場において約40名の会員が参加して盛大に開催されました。

楽しい中にも白熱した試合展開の末、岸通（88期）の左翼スタンドへのホームランによって、高々が5対4で勝利を納めました。

今年は前高OB会の主催により、前橋市民球場でナイターにて開催の予定です。

このOB定期戦には若いOBの参加が多数見込めるため、今後のOB会活動を支える上でも重要な行事となっております。

他にも、会員相互の親睦をはかる催し、また現役選手に対しての物心両面においての援助等今後もより一層充実した活動を目指しております。

同窓会ゴルフ大会レポート'95

優勝は小笠原庸介（55期）さん

ベストグロスは小野里篤雄（66期）さん

第二回高高同窓会ゴルフ大会は平成7年12月1日(金)・県営新玉村ゴルフ場にて行われました。

当日はうす曇り、微風のまずまずのコンディションで、高商・高工・農二の招待プレヤーにも参加を願い、総勢一三〇名の参加によって盛大に催されました。

今回も最年長は45期の室賀・池田・狩野・梁瀬・松本・伊藤・金子・金井の大先輩で、昨年同様全員参加して下さいました。本当に若々しくたくましい先輩達です、今後もこの大会に連続出場してほしいと思います。

最年少は、85期の富田和弘君でした。45期～85期までの幅広い層の参加で高々OBの幅広い交流ができました。

プレー終了後、同窓会長（本大会会長）の小山先輩がかけつけてくださり、御挨拶の後、表彰式が行われました。

閉会式には富田君のリーダーによる応援歌・翠巒を皆で合唱し、同窓会の気分を味わうことができ、意義深い一日でした。

又、昨年同様本大会の上位グロス15位を平成8年度群馬県下高校OB対抗ゴルフ選手権大会の候補選手と致しました。

（丸山・60期）

■ネット

順位	期	氏　名	グロス	HC	ネット
優　勝	55	小笠原庸介	82	13.2	68.8
準優勝	60	船藤　武志	89	19.2	69.8
3	71	堤　康高	88	18.0	70.0
4	52	内藤　量夫	89	18.0	71.0
5	57	早川　弘	93	21.6	71.4
6	61	与口　健一	91	19.2	71.8
7	58	清野　哲雄	85	13.2	71.8
8	55	悴田　寛	90	18.0	72.0
9	66	小野里篤雄	78	6.0	72.0
10	75	藤巻　公	95	22.8	72.2
11	66	小茂田　猛	94	21.6	72.4
12	56	悴田　昇	87	14.4	72.6
13	64	城田　明彦	87	14.4	72.6
14	66	吉村　研策	93	20.4	72.6
15	64	羽鳥　篤	80	7.2	72.8
16	65	堀井　勝成	92	19.2	72.8
17	55	沼賀　勝平	85	12.0	73.0
18	62	川手　義昭	79	6.0	73.0
19	60	小林吉太郎	90	16.8	73.2
20	56	五十嵐保次	89	15.6	73.4

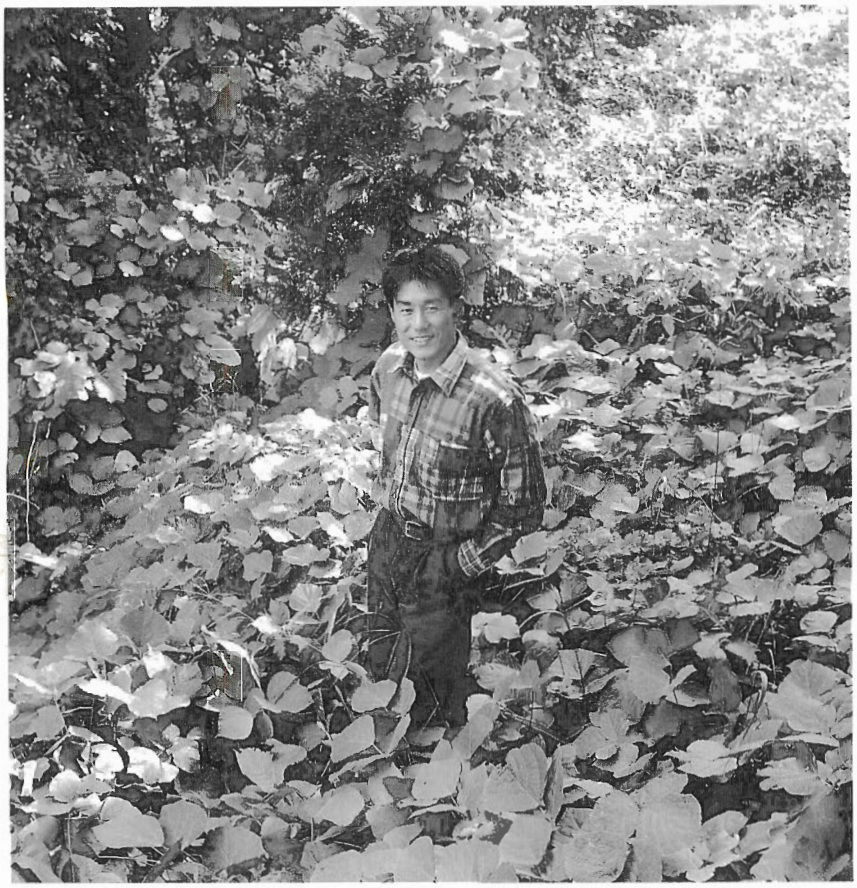
■グロス

グロス	期	氏　名	アウト	イン	グロス
1	66	小野里篤雄	40	38	78
2	62	川手　義昭	40	39	79
3	64	羽鳥　篤	42	38	80
4	55	小笠原庸介	40	42	82
5	68	後藤　次一	43	40	83
6	55	沼賀　勝平	41	44	85
7	66	新井　忠雄	42	43	85
8	58	清野　哲雄	44	41	85
9	60	島田　幸夫	44	42	86
10	56	悴田　昇	43	44	87
11	64	城田　明彦	42	45	87
12	68	根岸　博昭	47	40	87
13	工	須田　久雄	42	46	88
14	71	堤　康高	45	43	88
15	52	内藤　量夫	46	43	89
16	56	五十嵐保次	44	45	89
17	60	船藤　武志	48	41	89
18	60	原　巌	45	44	89
19	55	悴田　寛	47	43	90
20	55	野崎　寛	46	44	90

特別寄稿

重なり合う過去と未来

フリースタイルプロスキーヤー
角皆優人（水泳部・72期）



高々に在学当時のことを思い返してみると、つくづく、自分の根っ子はあの時代にあるのだと感じてしまう。

いったい、どれほどたくさんの想いとともに烏川の流れを見つめたことだろう。どれほどの想いで剱田橋からの夕日に見入り、色を変える観音山の木々を眺めたことだろう。今、考えてみると、そうした体験が、今のわたしを造ってきたように感じられてならない。

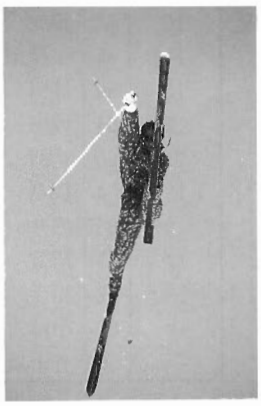
高校一年の時、わたしはからだを壊して入院した。水泳部に属し、オリンピックを夢見ていたわたしはただ闇雲にトレーニングし、倒れたのだ。そして、入院し、ベッドに横たわり、重い挫折感に襲われていた。

今でもはっきりと覚えているが、この時、人生は無限に続く拷問のように感じられた。自分を理解してくれる人はなく、生きることは孤独で、あまりにも寒々しいものに感じられた。

退院し、学校に戻っても、その感覚は去らなかった。そして、わたしは授業を抜け出し、護国神社をさまよい、烏川の土手にさまよっていた。

それまで持っていた明るく健全な未来像はこの時、すでになかった。大学にいこうという気も失せ、不安と焦燥感に襲われていた。

そんななかで、たったひとつだけ夢と呼べるものがあった。非常に漠然とした夢ではあったが、そこには光が差し込んでいるように思えたのである。それは、世界中を飛び回ることだった。いろいろな国にいき、いろいろな人と知り合うことだった。日本にはいたくない。そんな気持ちも強かった。しかし、どうしたら世界にでられるのか、まったくわからなかった。加えて、具体的な努力をするためのエネルギーすら感じることはできなかった。



やがて、なかば惰性で大学に入り成人し、そんな夢も遠ざかる頃、不思議なきっかけでスキーをはじめた。そのただ一回のできごとが、わたしを大きく揺さぶったのである。そこにあったのは、「目的のある生き方」ではなく、「過程を大切にする」生き方だったといってもよいだろう。

わたしはスキークラブを作り、スキー場で働き、選手になった。皿洗いし、リフトの切符を切り、圧雪車を運転した。やがて、スキーの上達とともにパトロールになり、インストラクターとなった。在学中にプロの資格を取り、大学を中退して滑り続けた。

わたしが夢中になったのは、当時見ることすら珍しいフリースタイルスキーと呼ばれる危険でアクロバティックなスキーだった。

数年が経ち、気がついてみると、わたしは世界中を旅するようになっていた。

ワールドカップを転戦し、トレーニングや仕事で、世界中を飛び回っていた。そして、かけがえのない友人を、世界中に持っていた。それは、まるで大きな竜巻に巻き込まれたかのような青春だった。人生の流れはわたしを強烈に捉え、押し流したのである。わたし自身の力より、はるかに強い何物かが、わたしの運命を動かしているようにすら感じられた。

スキー選手にとっては遅い引退時期を迎えたときも、日本初のフリースタイルスキー場建設やコーチとしての仕事が山のようにあった。結婚し、気がついてみるとスキー場の副支配人となり、全日本スキー連盟のヘッドコーチとなっていた。そして、世界選手権、オリンピックとビッグイベントも目白押しだった。

しかし、この頃だったろうか、行き詰まりを感じはじめたのは…。

スキーにたずさわって以来、無縁だった類いの悩みや苦しみを感じるようになったのである。会社と全日本スキー連盟というふたつの組織の中で、わたしの居場所はどこにもないように感じられはじめた。どちらの組織もわたしに結果を求め、「何をなすか」を求めていた。しかも、会社とわたしの方向は食い違い、全日本スキー連盟は姿の見えない妖怪のように捉えどころなく、手ごたえがなかった。そんななかで、わたしは自分の居場所を見つけようともがいていた。

結局、ある朝、決意して会社を止め、自分の事務所を開き、スキービジネスの世界へと飛び込んだのである。

こうして一般の人からみたなら、理解しがたい世界へと足を踏み入れることになった。エアリアルショーと呼ばれるサーカスのようなスキーショーをこなし、スキー雑誌に執筆し、スキースクールの経営に携わるようになった。

現在、わたしは長野県白馬村に住み、そこを基点にスキースクールをおこない、いくつかのスキーイベントをおこなっている。スキースクールには全日本チャンピオンや世界チャンピオンをめざす若者が集まり、毎日、熱い汗を流している。そして、いつ頃からだろうか、わたしの関心はふたたびあの高校時代の問題へと戻りはじめたのである。単純なスポーツの勝敗ではなく、その裏側に隠れている深く大きな意味を見つめるようになったのだ。そして、和田橋から夕日を眺めていた時と同じ疑問が、わたしの胸に去来するようになった。

『人間はいったい、どこから来て、どこへ行くのだろう…』

思い出してみれば、わたしがスキーを滑り続けているのも、その答えを捜しているからに違いない。そして、突き上げるような情熱に身をまかせて滑り続ける若者たちも、どこかでその答えを捜しているに違いない。

人間は意志を持ち、選択の自由を持っている。が、しかし、それを遥かに超えた何かに動かされているという強い実感が、わたしにはある。もしかしたら、わたしたちはより大きな何物かの一部であり、そうしたより大きな存在に生かされているのではないだろうか。そう考える時、わたしたちに大切なことは人生で「何をなすか」ではなく、「いかに生きるか」ではないだろうか。

高々時代のわたしは挫折を経験することで、「いかに生きるか」を大切にしてきた。それが実社会のなかで「何をなすか」を求められ、はじめて苦悩が生まれてきたように感じられてならない。

ところが、たくさんの体験を経た後、もう一度、わたしは自分の原点である高々時代に帰ってきたのではないだろうか。そこでは常に「いかに生きるか」が一番問われている。つまり、「目的のためには手段を選ばない」のではなく、「手段のためには目的を選ばない」という生き方である。どうも、四十一才のわたしは、限り無く高校一年の自分に近づいてきたようなのだ。

角皆優人氏〈PROFILE〉

全日本フリースタイルスキー選手権において計7回の優勝を果たし、バレエ・モーグル・エアリアルの種目別において計35回の優勝を記録している。世界選手権・ワールドカップを含む国際大会において優勝他、入賞多数。日本が産んだ初の国際的スター選手である。

10代は水泳（競泳）選手として活躍。

スキーは20歳を過ぎてからはじめるという異色の経歴を持つ。

現役を引退した後、日本初のフリースタイル公認スキー場の設計・開発・運営を手がけ、ワールドカップを日本に招致した。1986年以降は、全日本ナショナルチーム・コーチとして後進の育成にあたり、1990年にはヘッド・コーチに就任している。

現在は『Office 天 Ten』代表。日本ノルディカ株式会社、チロリア・ジャパン社のテクニカル・アドヴァイザーとしてスキーのマテリアル開発に関わる他、裏磐梯猫魔スキー場のアドヴァイザーとしてスキー場開発にも携わっている。またフリーライターとして、コメンテイターとして広くマスコミで活躍中。

青春の絆

陸上部

故障との戦い

坂本正樹（71期）

卒業して二五年。記憶はかなりデフォルメされているとは思うが、高校時代は陸上競技しかなかった。

陸上競技は、中学時代から中距離をやっており、高々に進学するとき、進学後の勉学のことなど全くと言っていいほど考えず、高校での陸上競技生活のことばかり考えていた。

高々入学後直ちに入部して、インターハイを目指し、当時とすれば自分でもかなり練習したと思う。結局四〇〇メートルを専門とし、記録も順調に伸びたが、一年生の九月末頃、股関節付近の剝離骨折にみまわれた。原因はオーバーワークだった。このため、体育の授業程度のことはできたものの、練習で走ることはできなくなってしまった。仕方がないので、完治することを信じ、毎日クラブには出席し、マネージャー的なことと上半身の強化に努めた。しかし、いっこうになおらず、二年生の冬頃から、本格的に砲丸投げの練習を始めた。砲丸投げを選んだ理由は、砲丸投げは走らなくてもよいので、患部への負担がかなり少ないことだけであり、これが得意だからではなかった。

二年生の三月にようやく全力疾走ができるまでに快復した。しかし、ずっと走っていないのだから、もう四〇〇メートルでは間に合わないので、砲丸投げと五種競技でインターハイの県予選に臨んだ。特に五種競技では優勝候補の一角とも目されていたが、そもそも今までろくに試合に出たことのない種目ばかり行うために、調整に失敗し、両種目とも僅かなところで、北関東大会に進むことができなかった。

普通ならば、ここでクラブは引退するところであるが、次に砲丸投げの県高校ランク一位をめざして、水を得た魚のようにいっそう練習に励んだ。夏休みも練習をしなかったのは、ただ一日だけであった。結局記録はさらに伸びたが、砲丸投げのランクは四位にとどまった。しかし、九月の学校対抗では砲丸投げ二位、円盤投げ四位になり、チームも二部優勝した。

多感な時代に一年半も故障という暗やみの中にいたが、これが一気に晴れたこともあり、その後の六ケ月は今思うとそれこそ何年間にも感じられる。特に学校対抗の最終種目の一六〇〇メートルリレーのアンカーが二位でゴールし、二部優勝した瞬間はバルセロナ五輪の岩崎恭子ではないが「今まで生きてきたなかで一番幸せ」だと思った。後に六回目の受験で司法試験に合格したが、その時と比較してもあの時の方が嬉しかった。

勝利への憧れだけで陸上競技をやっていたようにも思えるが、この単純さだけで高校時代が充実したものになったのだから（もっとも二年生の時は暗黒だったが）、それはそれでよかったと思う。確かに勉強や友人関係はその分不足していたと思うが、勉強は浪人時代に取り返したし、友人関係は現在では豊かなものとなっている（女性関係だけは豊かではありませんので、念のため）。

現在小学校の運動会で地区対抗のリレーで年一回走っているだけである。六〇メートル走るために何回かは練習してから出場しているが、驚くべきことに年々速くなっている。一緒に練習できる仲間さえいれば、月に数回くらい練習してマスターズ陸上に出て、今度は競技自体を楽しみたいと思う。

58期

青春の再スタート

山口人巳（58期）

私は入学が決まるとすぐに陸上部に入部しました。高々生となってちょっぴり優越感にひたっているのもつかの間、部活に勉強に新しいスタートが一斉に切られたのでありました。それは不安と苦悩の始まりでもあり、まるでメビウスの輪の上を走っているようで、ふと気付くとスタートラインにいるような毎日でした。

リレーのアンカーまで務めさせてもらえるようになった私でしたが……。

大学を卒業してからとにかく運動不足となりがちで、冬には風邪をひきやすく

体力も仕事にも自信がもてないようになっていました。そんな時、友人にさそわれて陸上部のOB会に出席しました。

2年程前の事です。

そこで現在陸上部顧問の岩井先生に相談にのって頂き、ずいぶん励ましていただきました。先生はそんな私でしたが、定期的にトレーニングにまで誘って下さるようになったのです。久しぶりに現役の選手と走る機会も与えてもらい、若い男の子達が火の玉のように突っ走る姿を見たとき、心のすみで燃えつきずにくすぶっていたものが何だったのか少し悟った気がしました。

最近、2年先輩だった中村さんに自分が近頃走っていることを得意になって話したところ、中村先輩はその日すでに10km程走ってきたばかりだったそうです。一期後輩の佐藤さんはいまだに現役の選手だそうで……。

青春は共に走りつづけること。たとえどこにいようとも。かくして私は一人、スタートを切り直すのであります。

（58期）

楽しい思い出

広田　誠四郎（64期）

◆昭和37年4月入学と同時に陸上競技部の部室を訪ねた。窓ガラスにはヒビが入り、トレパン・靴・スパイク等が散乱し、土と埃で汚れ、又、あの汗くさい臭いが私を歓迎してくれた。殺風景で暗い雰囲気だが『どこの部室も一緒』。そんな気持で高々の競技部に入部した。その思い出の一端を……。

◆後輩に横尾信男、岩上安孝、山木克己君等々活躍した面々もいるが今回は陸上部の先輩諸氏の思い出を記してみたい。

◆一年上の岩崎茂先輩は2中時代は野球の選手、高々では楽に1m80cm以上を跳んでいた。二年間よく一緒に練習させて頂いた。自宅も東町・江木町で近かったのでいつも一緒だった。未だ和田橋もなく自転車で八千代橋の砂利道を毎日通学した。やさしい背の高い兄ちゃんだった。その先輩とも卒業後は電話で話すだけだったが、二年前に訃報を聞いた。誠に残念だがご冥福を祈るのみです。

◆62期の岩田和弘、鈴木邦彦、古川俊隆先輩とは一年弱のおつきあい。岩田さんは短・鈴木さんは中距離で活躍されていたが古川さんは確か投擲でしたっけ。あまりグラウンドではお見かけせず、部室で楽しいお話を聞かせて頂いた記憶が残ります。

◆大須賀正臣先輩は私達と同時に高々に赴任された大学出たての現役でありその指導は迫力満点であった。57期の先輩は50期の大田部保先輩と共に高々陸上部のOB会を発足させ我々を指導頂くだけでなく、県内体育のリーダーとしてこの3月迄は吉井高校の校長、現在は県職にある。

◆大須賀先生を含めてご指導頂いた『ベース』こと内田光之先生は普段はやさしく時には厳しく面倒みて頂いた。最近は会えばすぐ判るその渾名も少し『角』が取れて丸いお顔になられた様です。益々元気な『ベース』先生です。

◆こんな先生、先輩に面倒みて頂き楽しい陸上部の三年間ではあった。私達64期後の紹介は別の機会に譲るとして昭和39年度の翠巒祭の紅白歌合戦の一コマをご披露して終りと致します。尚、写真は紅組の一部ですが、さあ私はどこにいるでしょう。

◆64期以前の先輩へ伝言。『陸上部顧問の『ドヂ』こと小林国重先生はお元気でよくOB会にご出席頂きます。まだ自転車で行動されています。』『どうかお気をつけてお元気でご活躍下さい。

紅白歌合戦プログラム

紅組アナ　竹内晶夫

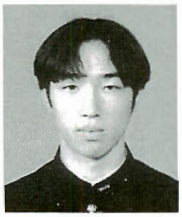
1. 森平　仁（サッカー）見上げてごらん夜の星を
2. 品田　正三（水　泳）おどりこ
3. 城田　明彦（柔　道）つゆこに逢いたい
4. 砂盃　実（山　岳）岳人の歌
5. 木村　勉（野　球）涙の敗戦投手
6. 江原　秀治（卓　球）ああ青春の胸の血は
7. 荒井　徹（バスケット）ラ・ノビア
8. 飯塚　中（剣　道）世界を駆ける恋
9. 茂木　正二（ラグビー）ブルーハワイ
10. 広田誠四郎（陸　上）星空に両手を
11. 宮島　謙次（応　援）学生節

白組アナ　寺島伸二

1. 原田　求（図　書）美しい十代
2. 白井　勇（数　学）正調武田節
3. 一場真太郎（書　道）赤いハンカチ
4. 青山　一心（JRC）君恋し
5. 井田　尚男（物　理）高校三年生
6. 佐藤　純司（吹奏楽）ワシントン広場の夜はふけて
7. 須藤一哉・桜井　馨（英語）学園広場
8. 鬼形　篤（英　語）若い歌声
9. 大谷　幸也（PFC）指切の街
10. 深沢久仁汎（生物物）北帰行
11. 田島　章（演　劇）ショート・オン・ラブ

○先輩頑張ってます　現役の抱負①

陸上部



浅見圭介

現在、私達陸上部は一人一人が自らの到達すべき目標を持ち、日々の厳しい練習に積極的に参加し、競技力の向上に努めています。

また私達は他校の陸上部とは違い、身近にある恵まれた練習環境を用い、かつてアジア大会において十種競技を制した実績をもつ顧問の岩井寿史先生の指導により技術・体力アップを図ることはもちろん、社会に出ても立派に対応できる人格の育成にも努めています。そして全部員が徐々にではありますが、両方の目標を達成しつつあります。

そうした中で、近年は多くの者が県大会において入賞し、関東大会はもちろんのこと、その上のインターハイ参加を目指せるようになりました。今年は総体・学校対抗において、総合三位入賞を達成することを部の第一の目標とし、練習しています。

先輩方が長い間育て上げてきた陸上部の伝統を更に輝かしいものとする為に部員一同これからも頑張っていきますので、よろしくお願い致します。なお、今年の関東大会は地元群馬で開催されますので、大きな声援をお願い致します。

卓球部

倉林和隆

私達、高崎高校卓球部はここ数年低迷していて目立った成績は出せませんでした。しかし昨年の総体で惜しくも関東大会出場を逃したものの団体戦で第四位になり、インターハイ予選団体ベスト8、前高との定期戦で五対四で勝ち、新人戦団体戦ベスト8という好成績を残すことができました。このような成績を出すことができたのは去年の顧問の鵜生川先生や小沢先生の熱心な指導のおかげだと思います。

現在の部の様子は、部員が三年生三名、二年生六名、一年生十三名います。僕達三年生は総体が終り引退しました。今年の総体はあまりよい成績を出せませんでした。しかしこれから行われるインターハイ予選・定期戦・新人戦に向けて一、二年生は顧問の加藤先生や小沢先生のご指導のもとで一生懸命に練習に取り組んでいます。これからも卓球部を応援して下さい。

ソフトテニス部

関　仁

高々ソフトテニス部は、三年十三人、二年十二人、一年十八人の計四十三人という群馬県男子ソフトテニスの中では最大の部であり、部員一丸となってインターハイ出場を目指し、練習に励んでいます。

現在の群馬県強豪チームは、前橋商業・渋川・農大二高です。高々は平成七年九月の新人戦に於て団体、個人共に準優勝、各招待試合に於ては優勝、平成八年度高校総体に於ては数年ぶりに決勝リーグに残りました。残念なことに団体戦における関東大会出場はなりませんでしたが、この大きな悔しさが、部員のさらなるやる気を呼び起こしてくれました。

現在、早くから朝練をする者、早弁して昼休みに練習する者、練習終了後に残って球を打ち続ける者と、皆が積極的な姿勢で頑張っています。

僕は「やる気」に勝るものはないと考えています。大きな「やる気」の塊と化した高々ソフトテニス部を今後ともどうぞ見守り下さい。

最後になりましたが、日頃から御支援下さっているOBの皆様に、この場をお借りして、御礼申し上げます。

バスケットボール部

古賀直樹

我々バスケットボール部は三年十三人、二年十六人、一年十人の計三十九人で活動しています。

現チームは長身選手が不在で、個人の能力も乏しいながら、立見先生・水上先生・町田先生のご指導のおかげで、新人戦・高校総体と念願の優勝を収めることができました。

しかし、総体の決勝では一時相手に十八点ものリードを奪われるなど、実力は大変均衡しています。また、他のどの学校も、高々に勝つということを考えて、練習を積んでいるため、我々は、ディフェンスを基盤とした高々のバスケットをより一層磨いていく必要があります。

そのために今は、関東大会、そして最大の目標であるインターハイ予選に向けて、小さいチームに欠かすことのできない強い脚力と正確なシュート力をもう一度強化するために、日々鍛練しています。

そして、必ずや全国への出場権を勝ち取り、先輩方が築いてくださった高崎高校バスケットボール部の伝統を守っていきたいと思います。

○先輩頑張ってます　　現役の抱負②

バレーボール部

青山正一

ぼくたち高崎高校バレーボール部は、顧問の田口先生、木暮先生、関口先生の指導のもと、毎日の練習に励んでいます。四回ある大きな大会のうち三回を終えてベスト4に入るという安定した力をつけてきています。先輩たちが築きあげてきた、高々バレー部の伝統に負けないようにと、各自が目標を持ってがんばってきました。ぼくたちは、高崎高校にしかできない、「集中力をもって、冷静に考えるバレー」ということを目標に、試合をしてきました。その集中力を養うために休みの日や、連休なども、練習試合・合宿を組んで、自分の力を全て出しきれるように、努力をしています。

ぼくたち三年生には関東大会と、インターハイしか残されていません。しかし今までの努力と、先輩方の応援を無駄にしないように、一日一日の練習を精一杯に、そして残り少なくなった公式試合も全てを出しきって悔いの残らないように部員全員一丸となってがんばろうと思います。

ラグビー部

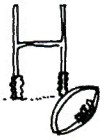
喜多川孝欽

先輩の皆様、いつも暖かいご支援をいただき有難うございます。今年は新入部員が十人と少ないですが、総勢三十八人で古豪復活を目指し、日々練習に励んでいます。

新人戦、総体とも準決勝戦で前高に負けてしまいましたが、その差は縮まったことを肌で感じました。

近年、総体が終わると多くの三年生が部を去っていくという悪しき習慣が生まれつつありましたが、それを断ち切って今年は揃って花園を目標に頑張って行けそうです。

今年のチームも他校に比べ小柄ですが、意気込みは絶対に負けていません。文武両道、机に向かう時間も必要ですので練習時間は限られますが、持久力をつけ、スピードある展開ラグビーができるチームにしたいと思っています。通常の練習は月曜から土曜の放課後にやっております。先輩の皆様、お時間がありましたら是非グランドに来られてご指導して下さい。



サッカー部

松岡輝

サッカー部は新人戦・県総体・インターハイ・選手権といった4つの大会に照準をあわせ、顧問の坂田先生をはじめ、部員全員が一丸となって、毎日厳しい練習をしている。練習は毎日二、三時間で夏は休みを利用して練習試合が多く組まれており、冬は基礎から体力トレーニングまでやり、大会前には戦術的な練習など一年を通して様々である。もちろん、どの時期でもかなり厳しいが、学校目標でもある「文武両道」に徹し皆がんばっている。

現在部員は約六十人である。おそらく高々の中では一番大きな部活であるだろう。新入生が新たに加わり、練習がとても活気づいてきた。そしてまたレギュラー争いもより厳しくなってきた。

このような我がサッカー部の目標は、部員誰もが心に抱いている県制覇である。県を制するには、前橋商業・前橋育英高校という二強を倒さなければならない。そして、我がサッカー部はこの二校を倒す実力を着実につけてきている。

先輩方の期待に応えられるよう、また自分たちの夢を叶えるために毎日厳しい練習をがんばっているので、先輩方のお力添えをぜひよろしくお願いします。

水泳部

田口智行

我々水泳部は、昨年、高々水泳部の歴史に新しい一ページを書き加えました。それは、メドレーリレーで初めてインターハイ出場を果たしたことです。先輩方が築き上げたこのような立派な成績を尊敬しつつ、それに負けないよう、現在、日々努力を重ねています。

主な活動内容は、五月下旬から泳ぎ始め、大会に向けて六月中旬には一週間、校内合宿を行います。そして、ベストの状態で関東予選、高校総体、新人戦に臨めるように泳力向上に努力します。シーズンオフには、球技や陸上トレーニングなどで体を鍛え、週に一度温水プールを利用させてもらっています。そして伝統となっている海への合宿も部員団結のために行っています。

目標としては、何度も何度も自分の限界へ挑戦し、その中で弱点を克服し、気力・体力を十分身につけられるようにして、さらに協調性も養うと共に今後の活動へのエネルギーをつくり出せたらと思っています。

最後に水泳部を支えてくれている顧問の先生方、OBのみなさんにお礼申し上げます。

○先輩頑張ってます　現役の抱負③

柔道部

長谷川匡基

我々柔道部は、三年七名、二年二名、一年八名の計十七名で日々稽古に励んでいます。毎日の練習の他に、春、夏、冬休みに校内合宿を行っています。合宿ではOBの先輩方や、大学生、バルセロナ五輪銀メダリスト、女子柔道の溝口紀子選手など、世界で活躍されている方々に来ていただき、技の講習をしていただいています。

しかし、このような恵まれた環境にありながら、秋季大会、新人戦、共にベスト4の壁を破ることはできませんでした。上位入賞をめざし、「闘」と「去私就人」の文字が刻まれた新たな部旗と共に挑んだ、県高校総体では、ベスト4をかけ、桐生第一高校と闘いましたが、惜しくも2ー2の内容で敗れ、第五位でした。しかし、「六年連続関東大会出場」という新たな伝統を築くことができました。

我が高崎高校柔道は、寺町先生の指導の下、モットーである「弱い者が努力して強い者に勝つ」を掲げ、精進していこうと思います。そして、先輩方が築き上げてきた伝統をくずさないよう、また、新たな伝統を築いていけるよう、努力していきたいと思いますので、これからも応援をよろしくお願いします。

剣道部

斉藤建一

我々剣道部は、先輩方が築き上げてきた「伝統」を発展させるべく、日々努力し続けています。

剣道部には、OBで形成されている「剣友会」というものがあります。剣友会の方々には日頃、技術面、精神面、資金面などの様々な点で大変お世話になっています。

部内は雰囲気よく、練習においては部員一人一人が目的を持って、一本一本大事にするように心がけ、短時間集中、気合第一に毎日一生懸命稽古に励んでいます。

成績におきましては、昨年の県選手権ではベスト8に入り、一月の新人戦ではおしくも準決勝で育英高校に敗れてしまいましたがベスト4にくい込むことができました。そしてこれを弾みにと、先輩方が成し遂げた「関東大会出場」を目指し、今回の高校総体にチーム一丸となって臨みました。2回戦で強豪樹徳高校を破って勢いづき、ついに目標であった「関東大会出場」を果すことができました。

残された時間はあとわずか。有意義に過ごし、さらに邁進したいと思います。

最後になりますが、先生、先輩方のより一層の御指導よろしくお願い致します。

硬式野球部

樋口敦司

現在の硬式野球部は、三年生十五名、二年生四名、一年生十名の計二十九名で活動しています。九十年の伝統ある高崎高校硬式野球部員として、「甲子園出場」を目標に樽見部長、佐久間監督そして顧問の先生方の熱心なご指導の下、チーム一丸となり日夜練習に励んでいます。

高々という勉強を第一とする学校の中でも、部活を熱心に取り組んでいます。だからといって勉強をおろそかにしているわけではなく、しっかり「文武両道」を実践しているのです。

我々三年生にとって最後の大会である夏の大会がもう間近に迫ってきて、残された少ない日々を「可能性」に向かって全力投球していこうと思います。

そして、一試合でも多く勝ち進み、悔いのない、又高崎高校硬式野球部員として恥ずかしくない試合をしたいと思います。

最後になりましたが、先輩方のより一層の御指導・応援をよろしくお願いいたします。

応援部

遠間　修

第四十五代応援団となってから今までに、夏の野球応援、定期戦、全校集会等でのリーダーを務めてまいりました。

夏の野球応援では昨年同様に野球部、吹奏楽と何回かの合同練習を経て臨みました。まだ反省点は残っていますが、応援する者の気持ちをまとめ上げ、全員一丸となって、勝利を目指し応援できたと思います。

定期戦では我々高々生は意気も高く、前回の雪辱を晴らすことができました。校歌の歌声も大きく圧倒的に前高を上まわっておりました。しかし綱引き等では練習不参加の者が多く前高の前に惨敗を喫しました。今後はこの様な状態をどのように改善していくかが課題となっていくと思います。またこれは全校集会等にも見られ、翠巒を知らない者や校歌を歌わない等高々生の団結力が弱まっていると思います。

我々応援団が存在することによって、高々生の団結を高め、高々を日頃から、活気に満ちた学校になるよう今後も努力していくつもりです。

○先輩頑張ってます　　現役の抱負④

テニス部

貫井慎也

高々テニス部は、一昨年が総体優勝、昨年が総体三位と毎年なかなか良い成績を残しています。そして今年は総体三位ということで、なんとかがんばった甲斐がありました。現在テニスは、育英高校がダントツに強く、次いで桐生工業、そして高々、・・・という具合です。密かに優勝を狙っていましたが、準決勝で、育英に当たり、ささやかな夢も打ちくだかれました。でも、まあ目標としていた三位になれたのでよかったです。三年生にとっては、残すところインターハイ予選だけとなりました。恐らく最後の大会です。予定としては、三位を表面上目指し、密かに優勝を狙うというところです。

今テニス部では、三年生がもうすぐ引退し、二年生が、部活の主役になるという交代の時にさしかかっています。今年はとくに顧問の先生がかわってしまうこともあって、ちょっぴり心配ですが、きっと彼らならやっていけるはずです。

というわけで、我々高々テニス部はこれからも驀進します。

スキー部

森　有史

スキー部は、我々の代から部員数が急激に増加し、そのため、普段の活動は理想とは程遠いものとなってしまっていました。というのは、我々スキー部は『自由』を原則として活動しているため、急増した部員がまとまりずらくなってしまったのです。そのような状況の中で、オフシーズンのトレーニングもしっかりとできたとは言えません。

しかし、シーズンに入ると、合宿以外にも意欲的な部員が集まり、用具とポールの束を携えて積極的にポールトレーニングをしに行きました。

大会では芳しい成績を残すことはできませんでしたが、部員それぞれは目に見えてスキーの腕を上げました。

それに、今年は『やる気』のある五名の新入部員も入り、『やる気』のある部員同士でトレーニングに励んでいます。

彼らには『自由』を生かして自分の意志で思う存分活動し、苦しみさえも楽しんでもらいたいと思います。

弓道部

落合晋哉

はじめまして、現在高々弓道部の部長を務めさせていただいております落合です。我々は屋根も壁も床もない手作りの練習場、通称「青空弓道場」と呼ばれるところで毎日練習に励んでいます。

現在部員は三年生8名、二年生8名、また今年入部した一年生10名を合わせて計26名で活動しております。我々の練習目標として、正しい射型を身につけ、且つ正確な的中を出すことを主眼においております。

現在群馬県の高校弓道の内容は残念ながらそれほどよいものではないようです。原因はいくつかありますが、最も大きな原因の一つは指導者不足。そのため「ただ当てるだけ」という弓道が広がってしまいました。しかしそんな中、我が弓道部は射型に重点を置き、毎日の練習に生かしています。その結果、地方審査においてはほとんどの者が初、二段合格、これだけ有段者がいる弓道部は県内にはあまりないと思います。また、前に行われた県民体育大会二部では、個人が準優勝団体が5位、また高校総体では、個人3位、団体が決勝進出と射型だけでなく的中も出せるようになりました。

最後に、これから弓道部を引っ張ってゆく後輩達に、良い伝統を引継ぎ、作っていって欲しいと思っております。

空手道部

風間隆志

僕達は今、六月のインターハイ予選に向け、頑張っています。部の人数はあまり多くなく、少しさびしい状況ですが、一年生はやる気もあり、二年生もいい刺激になってくれています。

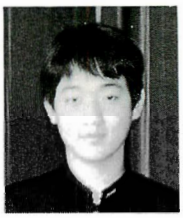
今までの成績を振り返ってみると、組手ではいまひとつ振わず3回戦どまりですが、型(かた)の部では、個人で決勝進出、団体でも決勝進出と、なかなか良い結果を残しています。

高々空手道部は、他の諸部活のように技術的な指導者がおらず、例年、先輩から後輩へと、技術などを伝えて今に至っています。しかしやはり僕達だけの力では後輩に指導仕切れない面もあるので、そこが難しい所です。なので現在は、特に一年生に正しくきちんとした技術を教えることに力を注ぎ、時間にけじめをつけて自分達も練習するよう心がけています。

先日行われた高校総体では、あまり全体としていい雰囲気で臨めず、結果もそれ相当のものでした。インターハイ予選には、気持ちを引き締めなおして、悔いの残らぬよう臨みたいと思います。

○先輩頑張ってます　現役の抱負⑤

軟式野球部



高澤亮典

我々軟式野球部は、月・水・金の週三回、八千代橋の河川敷のグランドで練習に励んでいます。練習内容は、キャッチボール、トスバッティング、フリーバッティング、ノックを中心として、試合を想定した実戦練習を折り混ぜ、密度・内容の濃い練習を心がけて、頑張っています。

ここ二、三年で部員の数が急激に増え今では全学年合計すると五〇名を越すほどに多くなりました。そして、一人一人が、毎回の練習において、自分自身に課題をもち、それを改善する努力と、それを周りの仲間がより高い技術向上のためにアドバイスや協力をすることにより、チームがより強くなるよう、監督・選手が一丸となって、関東大会出場を第一目標として練習にのぞんでいます。

部の成績は、昨年度の高校総体準優勝をはじめ、新チームになって最初の大会である全国大会県予選でも3位と好成績をのこしています。そして、先輩方の意志を受け継ぎ、それを高め、よりよいものにして、後輩達に残していきたいと思います。

現役運動部競技日程

平成8年度6月より抜萃して掲載

◇陸上競技
6月2　県記録会
22・23　県選手権国体二次予選
7月20・21　全国高校混成県予強化大会
8月24・25　国体県予選
9月21・22　県高校選手権学校対抗
10月12・13　県高校新人大会
12～17　国　体
25　県総体(駅伝)関東全国予
11月22・23　関東高校駅伝
1月19　県高校新人駅伝競走大会

◇バスケットボール
6月16　県高校選手権全総予
22・23　県高校選手権全総予
10月26　全国センバツ二次予
11月3迄　各地区新人大会
1月15・19　新人大会
25・26　関東新人県予

◇バレーボール
6月16　県高校選手権全総予1次
22・23　県高校選手権全総予2・3次
9月8　地区大会
11月10・17・23　秋季大会（竹田杯・菊地杯）
1月15・19　新人大会全国選抜1・2次予
26　新人大会全国選抜3次予

◇ソフトテニス
6月8・9　県高校選手権全総予（個）
15　県高校選手権全総2次予(団)
8月21・22　1年生大会
9月21・22　新人大会（個）
28　新人大会（団体）
全国高校選抜1次予
11月17・23　新人大会(団)全国選抜2次予

◇卓　球
6月15・16　県高校選手権全総2次予
11月16　新人大会(団)関東選抜予
2月15・16　新人大会(個)
男子(15)・女子(16)

◇ラグビー
6月16・22・30　国体県予選
9月1～28　1年生大会
22・28　県高校選手権全総予
10月6・12・20・26　県高校選手権全総予
11月7・10　県高校選手権全総予
1月11・19・25　新人大会
2月2・9　新人大会
3月20・21　県高校7人制大会

◇サッカー
6月8～23　全国総体県予
7月20～24　1年生大会
9月8・14・15　県高校選手権全国予(地区予選)
11月9～17　県高校選手権全国予
1月11～26　新人大会
2月1・2　新人大会（男・女）

◇水　泳
6月2　夏季記録会
7月6・7　県高校選手権関東予（競泳）
7　県高校選手権関東予
28　県総体
8月1・2　県総体（競泳）
5　国体県予（競泳）
8月24　新人大会
1月19　県記録会
2月2　冬季水泳記録会
23　全国ジュニアオリンピック春季大会県予

◇山　岳
7月26～28　国体関東地区大会
8月20～24　全国高校総体
10月6　山田昇記念杯
10月12～17　国　体
19～20　集中登山（新人大会）
11月16～18　関東高校大会

◇柔　道
6月16　県高校選手権全総予
8月9～12　全国高校総体
11月9　新人大会
1月18・19　新人大会全国予
3月19・20　全国高校選手権

◇剣　道
6月22・23　全国高校総体県予選
8月1～4　全国高校総体
9月21・22　県高校選手権
11月10　一年生大会
1月19　新人大会全国選抜予
3月27・28　全国高校選抜

◇軟式野球
7月24～29　全国高校選手権県予
8月5・6　北関東大会
9月14～　新人大会秋季関東予

◇弓　道
6月8・9　県高校選手権全総予
7月21　関東高校個人選手権県予選
8月6～8　全国高校総体
10月12　地区大会（4地区）
11月9　新人大会全国選抜県予
3月22～24　全国高校選抜

◇テニス
6月1・2・15・16　県高校選手権全総予
22・23・29・30　国体県予
8月1～8　全国高校総体
16～28　新人大会（個人）
10月28　新人大会（団）
11月3・4　新人大会（団）
1月25　強化大会

◇空手道
6月2　県選手権
22・23　県高校選手権全総予
9月14　1・2年生大会
23　県新人大会
11月9・10　新人大会関東選抜予
17　県民体育大会

平成七年度 運動部活動状況

①平成七年度県総体
②関東大会県予選
③関東大会
④全国高校総体県予選
⑤全国高校総体
⑥福島国体
⑦県高校新人大会
⑧その他

◎陸上

④百m　10秒79（羽鳥崇文）　1位
四百mリレー　42秒36（羽鳥・内田・浅見・藤岡）　3位
三段跳び　14m19（北村　武）　3位
⑧混成競技選手権兼強化大会
百十mH　16秒17（高橋弘旭）　2位
走高跳　1m85（横田真一）　3位
円盤投　39m60（天野大樹）　2位
⑧県高校対抗戦
百m　11秒24（羽鳥崇文）　2位
四百mH　56秒26（藤丘訓弘）　3位
⑦走幅跳　6m82（岸　義真）　2位

◎バスケットボール

①②1回戦　高崎133－18松井田
②2回戦　高崎88－25新島
3回戦　高崎72－65桐南
4回戦　高崎62－45太田
準決勝　高崎57－90前商　3位
⑧全国高校選手権県予選
1回戦　高崎57－17新島
2回戦　高崎104－42西邑楽
3回戦　高崎96－25桐工
4回戦　高崎96－59前工
準決勝　高崎74－83高商
⑦決勝リーグ
高崎47－38前商
高崎73－49樹徳　3位
⑦関東新人大会
高崎66－44桐生　1位

◎バレーボール

①②1回戦　高崎44－65霞ケ浦（茨城）
②4回戦　高崎2－0渋川
5回戦　高崎2－0前橋
準決勝　高崎0－2桐商
③1回戦　高崎1－2関東一（東京）　3位
④4回戦　高崎2－0富岡
5回戦　高崎2－0渋川

◎ソフトテニス

①②2回戦　高崎3－0藤工
②3回戦　高崎2－0関学
4回戦　高崎0－2農二　ベスト8
③（個人）
2回戦　松浦・横沢　2－4川越東（埼玉）
小板橋・片貝　4－2法政一（東京）
④1回戦　高崎3－0榛名
高崎2－1西邑楽
3回戦　小板橋・片貝　1－4武蔵越生（埼玉）
高崎0－2渋川　ベスト8
⑦4回戦　高崎2－0太商
高崎2－0高北
準決勝　高崎0－2桐商
⑧秋季大会
2回戦　高崎2－0富実
3回戦　高崎2－0農二
準決勝　高崎1－2前商　3位
決勝　高崎0－2桐商　2位

◎卓球

①②④1回戦　高崎3－0育英
②2回戦　高崎3－0渋工
3回戦　高崎3－0県央
4回戦　高崎3－2渋川
決勝リーグ
高崎0－3樹徳
高崎1－3伊商
高崎1－3桐生　4位

◎ラグビー

①②1回戦　高崎67－17高工
②2回戦　高崎5－71前橋
④4回戦　高崎3－0榛名
5回戦　高崎0－3前東　ベスト8

◎サッカー

①②1回戦　高崎3－0大間々
②2回戦　高崎2－0富岡
3回戦　高崎1－0藤工
4回戦　高崎0－2育英
④2回戦　高崎4－1藤岡
3回戦　高崎2－0高経附属
4回戦　高崎2－3前商
⑧全国高校選手権予選（1次予選）
⑦1回戦　高崎10－45前橋
2回戦　高崎17－0樹徳
高崎77－0富岡
高崎21－24関学
④1回戦　高崎86－0太田
2回戦　高崎10－20伊東　3位決定戦

◎水泳

②百m背泳　皆川　尚久　1位
百m バタ　上岡　英一　1位
二百m個メ　森田真太郎　1位
四百mR　（上岡・皆川・森田・小柏）　各2位
八百mR　（PK2－3）
上岡・森田・皆川・小柏　1位
※学校対抗2位
①千五百m自由　吉田　茂樹　2位
二百m個メ　森田真太郎　1位
四百mR　森田真太郎　6位
③二百m個メ　森田真太郎　15位
四百mメドレー　上岡・森田・皆川・小柏
⑤二百m個メ　森田真太郎　13位
四百mメドレー　森田真太郎　23位
⑥四百m個メ　森田真太郎　17位
⑦百m自由　小柏　雄介　1位
百mバタフライ　清水　和貴　3位
二百m背泳　清水　雄介　2位
四百m個メ　田口　智行　2位
二百mR　田口・青木・吉田・小柏　1位
四百mR　小柏・田口・清水・吉田
小沢・大崎・清水・小柏　2位
⑦決勝トーナメント
1回戦　高崎2－1関学
2回戦　高崎0－4前橋　ベスト4
3回戦　高崎4－0農二
⑦4回戦　高崎0－0前橋　ベスト8
3回戦　高崎4－0渋川
2回戦　高崎2－0桐南
1回戦　高崎2－0新島
⑧2回戦　高崎4－0伊工

◎柔道

①②2回戦　高崎5－0桐南
3回戦　高崎5－0渋工
④4回戦　高崎0－5育英　ベスト8
③予選リーグ
高崎2－0磯原（茨城）
高崎0－0宇都宮学園（栃木）
⑦2回戦　高崎4－1中之条
3回戦　高崎1－4伊工　ベスト8
⑧全国選手権予選
1回戦　高崎0－3育英
高崎　キケン　高北

◎剣道

①2回戦　高崎○－△太工
3回戦　高崎△－○育英　ベスト8
④2回戦　高崎4－1高工
3回戦　高崎5－0利実
4回戦　高崎2－0高商
準決勝　高崎2－3常磐
③予選リーグ
高崎▲－○甲府商（山梨）
高崎○－▲浦和（埼玉）
（予選リーグ3位）
⑦2回戦　高崎2－0利商
3回戦　高崎2－1新島
4回戦　高崎3－1伊東
準決勝　高崎1－2育英　3位
⑧県対抗選手権
2回戦　高崎4－1利実
3回戦　高崎4－1吉井
4回戦　高崎4－3農二　ベスト8
準決勝　高崎1－3前商　3位

◎軟式野球

①②1回戦　高崎7－0前南
②2回戦　高崎6－0館林
準決勝　高崎3－6前商　準優勝
決勝　高崎2－1桐工
④1回戦　高崎0－2高工
2回戦　高崎4－3前南
準決勝　高崎0－2高工　3位

◎テニス

①②2回戦　高崎3－0前南
②2回戦　高崎2－0西邑楽
3回戦　高崎0－2常磐
4回戦　高崎3－0桐工　3位
④1回戦　高崎3－0渋川
準決勝　高崎0－2育英　ベスト4
⑦2回戦　高崎0－2中央
3回戦　高崎3－0太東
4回戦　高崎2－3前橋
準決勝　高崎2－3高経附属　3位

◎硬式野球

春季関東地区高校野球大会群馬県予選
2回戦　高崎11－3桐生工
3回戦　高崎1－11高崎商
全国高等学校野球選手権群馬大会
1回戦　高崎1－4中央
秋季関東地区高校野球大会群馬県予選
2回戦　高崎10－9仁田
高崎2－6高崎工

翠巒体育会役員名簿 (平成8.5.23)

	氏名	回	住所	電話	学校側顧問
会長	山口　正敏	58			学校長・古川　功
副会長(事業)	秋池宗一郎	65			教頭・本多　嘉実
〃(事業)	川手　義昭	62			運動部長・岩井　寿史
〃(庶務)	横田　茂	55			
〃(庶務)	塚越　章司	58			
〃(庶務)	木村　洋	59			
〃(書記)	小沢　武男	57			
〃(書記)	庭田登志男	68			
〃(会計)	佐藤　義夫	58			
〃(会計)	高橋　浩生	78			
会計監査	丸山　功一	60			
〃	廣田誠四郎	64			
顧問	国峯善次郎	50			
〃	岩田　武雄	53			
〃	清水　貞保	30			
〃	岡田　由重				
理事					
陸上	横尾　信男	65			岩井寿史・山口和士・田村修一
	坂本　正樹	71			
卓球	深沢　昇	57			加藤　聡・船戸秀道・小笠原祐治
	根岸　博昭	68			
軟式庭球	丸山　博	68			浦野克彦・関根正史・福田　亨
	下山万吉雄	63			
バスケット	須田　修巨	66			立見賢治・水上光久・町田　仁
	林　進一	72			
	橋爪　良真	75			
バレー	岩丸　高明	82			木暮　弘・田口哲男・関口穂積
	掛川　稔	82			
ラグビー	増田　一臣	60			櫻井　清・高橋正四郎
	上羽　正弘	72			長岡秀一・波止場研二
サッカー	阿久沢　茂	69			坂田和文・塩原秋雄・丸山直樹
	赤羽　英光	73			
	清野　哲雄	74			
水泳	新谷　恭一	54			安達　淳・木暮　弘・山口和士
	小此木　勝	56			
柔道	石井　清一	57			寺町良次・三浦昭久・箕輪　明
	関口　茂樹	63			
剣道	藤木　正行	69			栗原大介・戸塚泰聖・品川和男
	飯野　一彦	74			
	小池　政一	77			
野球	小山潤一郎	69			佐久間秀人・樽見尚人
	清水　正郎	75			田村　仁・関口　理・戸塚泰聖
	小林　均	77			
応援	永井　功	65			植原政明・丸橋　覚・三浦昭久
	堀口　清	65			
	秋山　賢治	74			
山岳					篠原正泰・戸塚英之・丸山直樹
					福田　亨
硬式テニス					塚越　究・松本正志・小泉誠司
スキー・スケート					小林政幸・櫻井　清・猿谷亮司
弓道					天野正明・飯野良二・戸塚英之
空手道					斎藤和義・斎藤勇夫・井本嘉宣
軟式野球					女屋　浩・丸橋　覚・飯塚　光
マラソン同好会					
編集部	大崎　哲朗	77			
事務局					
事務局長	櫻井　清	81			
	浦野　克彦	78			
	木暮　弘	82			

75期 小林 光橋東高(女子)

編集後記

翠巒体育会の活動の充実の為、四月二十九日に行われた「春の商都フェスティバル」のフリーマーケットに会として参加致しました。

商品として各部から持ち寄って頂いた品物は、その数三百点余り。朝九時、シティーギャラリーの前で、各部の代表が売り子となって商品を並べ、慣れない接客に汗を流しました。値付けに首をひねり、値切りに弱く、思いっきりのよい投げ売りは、お客様に大好評でございました。

苦労のかいあってお昼までに全商品を売り切り、会の団結と財務の為、大変貢献をして頂きました。皆様本当にご苦労様でした。

(大崎・77期)

翠巒体育　第十五号
平成八年五月二八日発行
翠巒体育会事務局
〒三七〇
高崎市八千代町二-四-一
群馬県立高崎高等学校内
電話
〇二七三(二二四)〇〇七四
印刷　㈲オーサキ